

Popper Letters

ポパーレター：日本ポパー哲学研究会会報

1991

Vol. 3, No. 1

日本ポパー哲学研究会事務局

(1991年 5月号)

ホープトリの汎批判的合理主義批判について

小河原誠

近着の *Philosophy of the Social Sciences*, vol. 1. 21, no. 1, March 1991において、ホープトリは汎批判的合理主義の論駁を試みている。(Bruce W. Hauptli, "A Dilemma for Bartley's Pancritical Rationalism") 筆者には彼の議論は重要ではないと思われるのだが、彼は、批判が提出されたときに汎批判的合理主義者が対抗論証を提出しえないならば、汎批判的合理主義は放棄されねばならないという言い方もしているの(p. 87)、筆者としては相手にされない議論もあるのだということをホープトリに思い出してもらいたいと思うものの、一文を草した次第である。

(1) ホープトリは、「汎批判的合理主義者は、すべての批判は暫定的であると主張せざるをえな

い」と言う(p. 87)。しかしながら、他方で、汎批判的合理主義についての「成功的」な批判は、汎批判的合理主義者をして批判的議論を放棄させるものであるという。したがって、「成功的」な批判を受け入れた後では、批判はもはや生じえないはずであるから、その「成功的」な批判は「暫定的な」ものではありえなくなるという。これは、すべての批判は暫定的であるという事への批判であるというわけである。ホープトリはきっぱりと「(汎)批判的方法論のさらなる適用による訂正に服するのであれば、それは「成功的」とは考えられない」(p. 88)と述べている。これを見ると、ホープトリは最終的論駁が存在すると考えているように見える。そして、ホープトリは、そうした「成功的」批判の存在の可能性から、汎批判的合理主義者が直面することになるディレンマなるものを引きだす。「パートリーの汎批判的合理主義者は、すべての批判が暫定的であるわけではない

=====

内容

- 1、ホープトリの汎批判的合理主義批判について・・・小河原誠
- 2、進化論的認識論と行動的無意味・・・山根正気
- 3、第二回年次研究大会及び会員総会の開催のお知らせ・・・事務局
- 4、THE PARADOX OF CORROBORATION：研究発表予稿・・・立花希一
- 5、進化論的認識論を越えて・・・山脇直司
- 6、掲示板・・・事務局ほか
- 7、原稿募集のお知らせ・・・事務局

ということを受け入れるか、汎批判的合理主義は暫定的にのみ批判されうると主張するか、あるいは汎批判的合理主義は批判可能ではないということを受け入れざるをえない」(p. 88)。{ここに述べられているのは、正確にはディレンマではなくて、3本の角であろう}。しかし、どの選択肢を取るにしても、批判のスコープは「制約」されてしまうのであり、包括的ではなくるとホーブトリは主張する。暫定的ではない批判が存在するということを確認するためには、すべての批判は暫定的であるという批判の概念を「制約」せざるをえないというわけである。汎批判的合理主義は暫定的にのみ批判可能であると主張するためには、(批判というものを廃絶するような「成功的」な批判があるにもかかわらず)、批判に非合理的な仕方コミットしていなければならないというわけである。最後に、もちろん、汎批判的合理主義者が、汎批判的合理主義は批判可能ではないと主張するならば、これは自己矛盾になるわけである。かくして、ホーブトリは、汎批判的合理主義は放棄さねばならないと結論するのである。

この議論は極めて珍妙である。ホーブトリは、「成功的」な批判というものが具体的にはどのようなものなのかを示すことなく、それが存在すると仮定する。そして、その「成功的」な批判が存在するならば、汎批判的合理主義は放棄されねばならないと言っているわけである。このような可能性は、じつはすでにパトリー自身が最終的論駁の不可能性を主張したときに見通していたことにすぎない。ホーブトリのいう「成功的」な批判、つまり、最終的論駁が、もし存在するのであれば、汎批判的合理主義が否定されねばならないのは当然であると言わねばならないであろう。この点をディレンマなるものの導出によって説明している必要などないのである。「成功的」な批判が存在するならば、汎批判的合理主義は矛盾に巻き込ま

れるのであるから、そのようなディレンマが生じてくるのはむしろ当然であって、生じてこないことの方が不思議と言わざるをえないであろう。問題は、果たしてそのような「成功的」な批判が本当に存在するのか否かということである。あると仮定することではない。ホーブトリは、「成功的」な批判なるものを現実¹に提出してはいない。そのようなものがあるという仮定の上での議論に過ぎない。汎批判的合理主義者は、現実²に「成功的」な批判が提出されたならば、自らの汎批判的合理主義を放棄し、沈黙するか、あるいは非合理主義者になればよいか、さらには、汎批判的合理主義は論破されても議論が可能な状況が存在するならば、合理主義についての新たな定式を求め、自分の立場が汎批判的合理主義二よっては不十分な形でしか表現されていなかったことを明らかにすればよいのであろうればよいのであろう。

(2) さらにホーブトリの議論は、ある見解を受け入れたり却下する際の吟味の過程を無視しているように思われる。ホーブトリの言う「成功的」な批判なるものは、汎批判的合理主義者によって、即座に、一瞬のうちに受け入れらるべきものとして考えられている。それは、一読のもとに受け入れられる(理解される)や否や、汎批判的合理主義者による批判的検討の過程を廃絶するかのごとくである。とするならば、そのような批判は、汎批判的合理主義者が理解を試みていく過程で一切の疑問を生じさせないものなのであろう。そうでないとしたら、それは、批判的検討の過程を廃絶するような「成功的」な批判ではなかったはずであるからである。

しかしながら、何らの疑問も生じさせないような批判あるいは議論というものが存在するのであろうか。われわれは、ある見解の論理的帰結のすべてを示したり、論じ尽くすことはできない。なぜなら、ある見解の論理的帰結は無限に存在する

進化論的認識論と行動的無意味

—リードルの人間理解—

山根正気 (鹿児島大学)

と考えられるからである。ホーブトリの言う「成功的」な批判が、真に「成功的」であるためには、そのすべての論理的帰結についてそれらが反批判にさらされる余地のないものであることを示さねばならないはずであるが、そのようなことは不可能と言わざるをえないであろう。ホーブトリの言う「成功的」な批判という概念には、論理的不可能事が隠されているように思われてならない。

(3) さて、上述の議論は、「成功的」な批判がありえないということの意味しているのであろうか。筆者はそうは思わない。汎批判的合理主義の提唱者であるバートリー自身が、いくつか反駁の可能性を指摘していたように、ホーブトリの言うような「成功的」な批判によらずとも、汎批判的合理主義を反駁する可能性は存在する(たとえば、Bartley, *The Retreat to Commitment*, app. 5を見よ)。筆者は、ここで、そのような可能性の一つとして、バートリー自身によっても、また、他の汎批判的合理主義者によっても指摘されていない可能性を指摘しておきたいと思う。それは、汎批判的合理主義の中心理念たる「批判」の概念そのものに内部矛盾が存在することを指摘することである。ポストによれば、批判するということは当該の見解が非妥当であることを立証することである(J. F. Post, "Paradox in Critical Rationalism and Related Theories," in *Evolutionary Epistemology, Rationality, and the Sociology of Knowledge* ed. by G. Radnitzky & Bartley, W. W.)。そして、非妥当であるということは偽であるか不健全であるということである。不健全であるということは、直面している問題を回避しているとか、有効性にかけるとか、豊饒でない、等々という事である。「批判」としての必要不可欠な選言項が確定された後で、そのような選言項からなる選言肢の全体としての不整合性が立証されれば、汎批判的合理主義は論駁されたことになる。

夏の雨上がりの日に、道路にできた水たまりでトンボが無心に産卵しているのを目にすることがある。こうした水たまりが、数日もすれば干上がってしまい、また車にふみにじられる運命にあることを考えれば、卵やヤゴが生き延びれるチャンスはほとんどないといってよい。トンボの一部の種は、水平におかれたガラス板や鉄板にまで産卵行動を示すことがあるらしい。何とおろかなことかと考える人もあろう。どうもこの馬鹿げた行動は、光を反射する面を水面とみなすことに起因するらしい。じっさい、人間の文明がトンボにとって迷惑なものをもたらすまでは、大抵の反射する面はトンボの幼生に適切な生活の場を保証していたのであろう。そのような環境で選択—リードルのことばでは選別—を受け進化してきたトンボにとって、産卵すべき場所を判断するのにそれだけで十分だったのであろう。それが証拠に、彼らはしっかりと子孫を現在に残しているのである。

さて、もしガラス板に産卵するトンボがじっさいにいるとすれば、それはこの本(「認識の生物学」)の著者リードルが「擬合理的行動の無意味」と呼ぶものに、まさにふさわしい。しかし、道路の水たまりの場合、やはり「擬合理的行動の無意味」がたいがいあてはまるだろうが、進化的にはいくぶん意味が異なる。というのは、事実そこには水があるのだし、もし片田舎の人通りの少ない所であれば、その水たまりは一時的に干上がるかもしれないが、つぎの雨でふたたび潤うかもしれない。孵化した多数のヤゴのなかで、もし多少の乾きにたえうる遺伝的な資質をもった

個体がごく少数でも含まれていれば、それらの個体は親にまで成長するかもしれない。その形質は選別によって保存されるだろう。たしかに水たまりの深さや寿命（安定生）がなんらかの方法で測定できるとすれば、一部のトンボの種はそれを実行しているかもしれない。一方、そのような判定に時間をかけるよりも、一定以上の面積をもつ水面に無差別に産卵したほうがより多くの子をのこせる種にあっては、結果としての「無意味な」行動はめずらしくないはずである。しかし、上でのべたように、一見したところ無意味な行動も、新しい適応を獲得する引き金になりうるし、そこでは新しい選別の条件がはたらくであろう。このようにして、著者のことばをかりれば、遺伝子が学習し新しい行動のパターンが獲得されていく。

主として擬合理的装置にたよっている動物が、人類文明による環境の急激な改変のため、無意味な行動を余儀なくされるケースが急増しているだろうことは容易に想像がつく。リードルは、この論理を人間にまで拡張する。こんにち我々は、自然ゆたかな原始状態のなかでの学習により蓄積された旧態依然とした遺伝情報にたよって、自らが改変した環境のなかであがいているのではないかと。現代人にみられる「無意味な」行動は、トンボの空しい産卵と同じだというわけである。これは、人間のもつ反省的な合理的装置（意識的理性）の歴史があさく、新奇な環境で生じることを適切に処理できないことによる、と彼は説く。こうした考えは、近代的動物行動学の確立者のひとりコンラート・ローレンツがつとに強調してきたものである。だが、本当にそうなのであろうか。

細かな哲学的論議はさておくとして、本書を通読してなによりも安心感を与えてくれたのは、實在論によせる著者のゆるぎない信頼であり、また、帰納にたいする素朴かつ正当

な評価である。生物の進化とは、じつは、環境のなかで自分たちの生活とかかわりの深い情報を、同時的あるいは経時的共在を手掛かりに帰納の助けで学習し、それによってえられた先入判断をもちいて自らをためしながらい進化する課程であるとみる著者の立場には、ほとんど全面的に賛成である。そのようにふるまう生物のシステムを、擬合理的装置とよび、その生物が過去に選別された条件がこんにちも続いているとすれば、それはまさに合目的性とみられるわけである。生物のもつ合目的性をこのようにとらえる立場にたいして、著者は科学的目的論（テレオノミー）という表現をもちいている。さて、問題はこの先である。

生物個体がそなえている合目的性を疑う者はいまい。それには理由がある。個体は、今日的観点にたてば、遺伝情報であるDNAをはこぶ「乗り物」であり、ふつうそこに宿るすべての遺伝子は個体と運命をともにする。そのため一般には、個体に宿る遺伝子、その指令によってつくられる器官、組織、行動は、個体の繁栄の「ために」協力しあう。したがって、自然選択の単位は遺伝子であるということがある意味でいかに正しかろうと、個体の統一性は生物界をみわたしたとき際だっているというのも事実である。しかし、なおかつ、個体を失敗に導くような遺伝子が存在することを強調しておかねばならない。生殖細胞（おもに精子）形成時における性染色体の分離比異常（マイオティックドライブ）をひきおこす遺伝子はその代表例である。短期的にはこの遺伝子は個体の利益を無視して急速にひろがるが、ふつうはほとんどの個体がオスになってしまい、集団が崩壊するとともにそのアウトロー遺伝子も自滅する。こうした遺伝子が出現しようということは、合目的性を、個体においてすらけっして過信してはならないことを示唆する。

ところが、この本の著者は、合目的性の論理をいとも無批判に社会や種にまで拡張する。ローレンツの伝統をかたくなに守りながら、「...常に、最上位の目的は、...すなわち種の維持」であり、「原因は上位の層から、すなわち究極的には種の維持から発している」と説く。個体のもつ合目的性は種が原因となって存在するというのである。進化論的認識論という、認識論の系譜のなかではユニークな発想が、ここにきて陳腐な訓話と化してしまう。ここには、社会や種、さらに種間関係、生態系といった諸階層が、生物個体といかに異なるものであるかという分析はいっさいない。「種を維持するために生物はふるまう」という観念はすでに完璧に論破されてきたにもかかわらず、本書にはそうした批判への反論はおろか、関心すらしめされていない。

合目的性の原因を種の維持にもとめることが、いかに誤った結論に導くかをみてみよう。まず、リードルが考えているような種（有性生殖をするふつうの生物）ではない、「種」について考えてみよう。これらの「種」（たとえば、単為生殖をする動物）は、現象的には有性生殖の種とよく似たまとまり（形態的・生態的に類似した個体の集合）として存在するが、その類似性は交配をつうじてではなく、類似した選択圧におなじように反応した結果として存在する。そうした個体が相互に交渉しあい、まさに集合の存在が個体の生存を有利にする場合もないとはいえないが、ふつうはそのような仮定は不要である。彼らは原因となる種をもたないのに、合目的的な体構造をもち、合目的的にふるまう。この本の著者は、それらの合目的性の起源を説明する義務があるだろう。さらに、生命がいまだ種という様式を採用する以前にそなえていた合目的性（これなしには生存できなかったであろう）はどこからやってきたのかについても、説明

されねばならない。

有性生殖をする種にあっても、社会や種というものは個体のような統一性をもってはいない。社会や群れの多くは、個体が自己の生存価を高める「ために」とった行動の結果として存在しているのであって、それらの集団につくすことが「目的」ではない。いいかえれば、集団は個体によって利用されるのであって、個体同士の搾取や反社会的（アウトロー的）行動が頻繁にみられるのは当然のことである。緊密な社会関係を必須の生存条件としている種においてのみ、社会の存在と個体の生存は運命共同体的な様相をおびるが、それでも個体は社会を崩壊させない範囲で社会とそのメンバーから最大限搾取しようとする。通常の種では、行動の判断は主として擬合理的なものであるから、つまり、蓋然性をたよりにしてなされるから、じっさいには結果として社会を崩壊させてしまうこともありうる。種にいたってはその統一性はさらにあやしい。種を生物個体のひとつ上位レベルにおける「個体」にたとえる議論もあるが、その場合でも含意されているのは遺伝的・時間的連続性の観念であって、構成要素たる個体に指令をだすたぐいのものではない。

以上のように、リードルの論議は根本的な欠陥をもっている。その欠陥は、彼が進化的な意味で選別ということばをつかうとき、ほとんどつねに種の外部からの作用に限定していることに、端的にあらわれている。彼にとって選別条件とは、種の外部からどの個体にもひとしくはたらくようなものである。このことは、一部の生物あるいは一部の形質についてはあてはまるかもしれない。しかし、本書が目的としている「人間性の解明」のためには、このアプローチはほとんど役にたたない。ダーウィンがすでに明確に指摘していたように、人間にとっての選別条件としては、天候や天敵などの外部条件もちろん重要だ

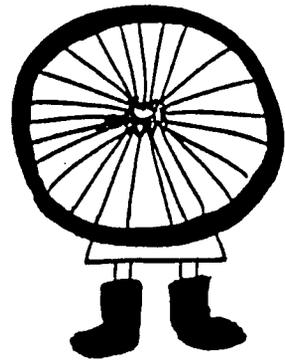
が、反省的な合理的装置をもっとも必要としたのは社会のなかにおける人間関係であった。社会内での選別の強さは、人間が外的環境から相対的に独立するほどにたかまった。社会は個人がそのなかで繁殖を成功させるべき環境となったのであり、その環境は人間が合理的装置を獲得していく過程で際限なく複雑化し、同時に苛酷なものとなった。合理的装置の歴史はリードルが強調するほど浅くはない。この分野における人間の能力は決してあなどるべきでない。

著者は、「人間は世界を改善したいと思っているながら、実のところそれを破壊してきたのである」というデルナーの一節を無批判に引用しているが、これほどのまやかしはない。人間は、明らかにまずいと考えられること（原発や核兵器など）であっても、多くの場合やめようとしなない。こうしたことがおこるのは、合理的装置の未熟（複雑な事象にたいする見通しのよわさ）も原因の一部かもしれないが、原因の主要な部分ではない。世界を改善したいと思っている人がいないとはいわないが、世界はそれによって動いているのではなく、自己や利害をとにもする集団の利益を追求するのに長けた人々がうごかしているのである。これに、「世界を改善しているのだと思い込んでいる人々」が大量に動員されているというのが真相にちかいのだろう。なぜある者は他を利用でき、ある者は利用されがちなのか。おそらく、人間は苛酷な社会のなかであまりに高度な合理的装置を進化させてきたため、その修得には高度に複雑な個体発生の過程をたどらねばならず、結果として修得の程度には大きなバラツキが生じるのだろう。そして、その過程は現実には教育というかたちをとり、教育自体は何者かによってコントロールされている可能性がある。世界が破壊されつつあるのは、人間が進化させてきた合理的装置そのものが未熟だからでは断

じてない。リードルの議論は、人間社会における競争という明白な事実を目をつぶり、また擬合理的装置の核心をなすのが利己性であるという視点を完全に欠落している。このように、現代の進化学、行動学、社会諸科学の成果のほとんどを無視するやりかたで、人間性が理解されるとは到底考えられない。彼流のアプローチでは、価値の相対性、民主主義、国家のしぶとい存続といった根本的な概念に迫ることは不可能である。

リードルは、遺伝物質に変異が生じ、それに選別（自然選択）が作用し、有利な性質が保存される過程を、遺伝子の学習とよんでいる。このような比喩に反対する理由はない。進化をてっとりばやく説明するには、比喩や目的論的な含みをもったことばをつかうことが便利だし、ときには避けられないからである（私もこの書評でそのような表現を「」つきで使用した）。しかし、多くの文科系の人にとって、「遺伝子の学習」という表現は誤解をまねくと思う。私の個人的経験では、生物哲学を論じる文科系の人が多くが、自然選択について理解するのに根本から失敗している。多少は遠回りと思われるかもしれないが、進化過程を理解するためには集団遺伝学のテキストを読んでみることをお勧めしたい。それがどうしてもおっくうな場合、せめて、通俗書であるドーキンスの『利己的遺伝子』（紀伊國屋書店）に目をとおしていただきたい。リードルが、遺伝子の学習ということばのもとに、自然選択についてあるていど理解しているのは事実だろうが、その理解はきわめて限定された意味においてでしかない。それは、すでに指摘したように、社会的選択を選択からほぼしめだしてしまっているからである。社会的選択こそが、推理力にもとずき判断をくださせる意識的理性を進化させてきたことを考えれば、リードルの理解不足は致命的である。人類の未来によこたわる暗い影

が、合理的装置の未熟によるのではなく、逆にその習熟によるのだとすれば、我々はいったいどうすればよいのか。まずは「未熟ゆえの失敗」というデマを粉砕しなければならないだろう。そして、多くの人が真実を知ったとき、何か新しい道がひらけるかもしれないし、あるいはそれも無力と化するかもしれない。生物個体は決して種を維持すべく進化してきたのではないということが、種を救うという「偉大な」事業の前途多難を予測するのである。（系統分類学）



第2回年次研究大会及び会員総会の開催のお知らせ

第2回年次研究大会及び会員総会を下記の要領で開催することになりましたのでお知らせ致します。お忙しい折と存じますが、万障お繰り合わせの上、是非とも御出席下さいませよう御案内申し上げます。

日時：6月29日（土）10時より

場所：青山学院大学総研ビル 7階第13会議室
渋谷区渋谷4-4-25（図参照）

03(3409)8111

会費：参加費 1,000円 懇親会費 5,000円

スケジュール：

10:00

個別研究報告（立花希一氏）

11:00

会員総会

11:20

—シンポジウム「進化論的認識論」—

司会（浜井 修氏）

11:30

基調報告（碧海純一氏）

12:10

昼休み

13:00

報告（鳥津 格氏、西脇与作氏、山脇直司氏）及びディスカッション

17:30

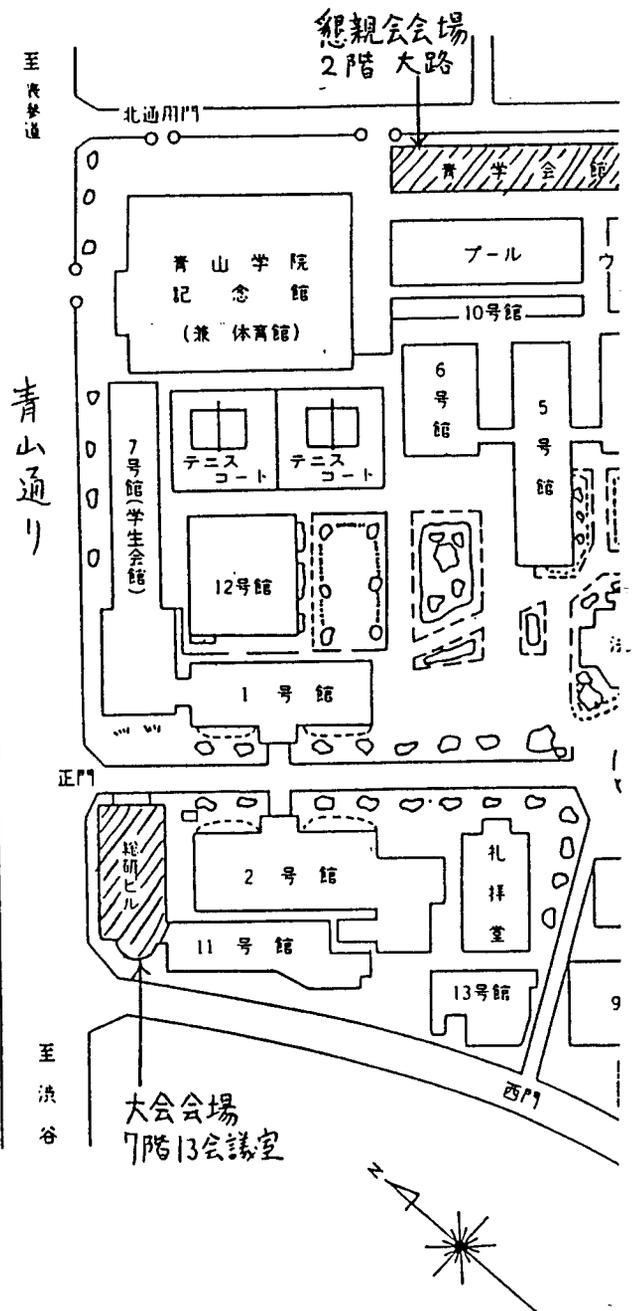
18:00

懇親会（青学会館2階 大路

図参照） 03(3409)8181

20:00

青山キャンパス建物配置図



The Paradox of Corroboration

Kiichi TACHIBANA

Akita University

This short paper is not the criticism of Popper's methodology of science but that of a certain interpretation of it. In his paper, 'Truth, Rationality and the Growth of Scientific Knowledge,' Popper introduces the third requirement and argues that corroboration is indispensable for the growth of scientific knowledge and falsification is not enough. According to the two different interpretations of the third requirement which requires the necessity of corroboration, the Popperian school can be divided into the two groups: falsificationists and corroborationists. J. Agassi and W.W. Bartley are the representatives of the former and I. Lakatos and J. Worrall are those of the latter. In this paper I limit my concern to the criticism of corroborationism and do not argue for falsificationism.

In scientific research corroborations of hypotheses occur. The problem is how to evaluate the role of corroboration or what is the status of the corroborated hypothesis. The corroborationists' interpretations of corroboration are not monolithic. There is a wide spectrum of interpretations from a whiff of inductivism to the full-blooded one. However, they agree that corroboration can be used as the criterion of the rationality of theory-acceptance. More concretely speaking, a hypothesis is supported by corroboration, that is, the failure of an attempted falsification, therefore, it is rational to accept

the corroborated hypothesis and it is irrational not to accept it. I maintain that this idea of empirical support produces the similar paradox as well-known Hempel's paradox of confirmation.

Hempel's paradox is as follows:

(I) A hypothesis: All ravens are black. ($(x)(Rx \supset Bx)$)

(II) Another hypothesis: All non-black things are non-ravens.

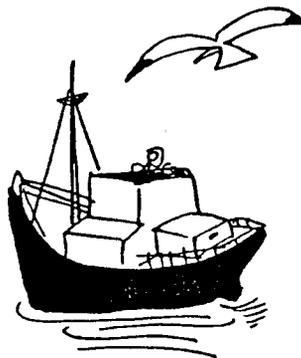
($(x)(-Bx \supset -Rx)$)

If $Ra \& Ba$ confirms (I), then $-Bb \& -Rb$ confirms (II). From the law of contraposition (I) and (II) are equivalent. Therefore $-Bb \& -Rb$ confirms (I). In short a non-black non-raven, for example, a white rabbit confirms "All ravens are black." This is paradoxical.

Similarly if you consider that falsifications of the potential falsifiers of a hypothesis empirically support the hypothesis, a paradox occurs. The falsifications of $Ra \& -Ba$ which is a potential falsifier of a hypothesis (I) are either $Ra \& Ba$, $-Ra \& Ba$ or $-Ra \& -Ba$. The above instances support (I). By fictitious example the paradox may be evident.

There has been a hypothesis that all ravens are black. A scientist receives an observational report that a white raven was discovered. The crisis of a falsification of the hypothesis occurs. Some scientists go to see the white raven and inspect it carefully. As a result the white raven turns out to be a black raven which is painted white. The falsifying instance is falsified. A whitely-painted black raven supports (I). Similarly, a whitely-painted black swallow which wears a raven costume supports (I). Or a whitely-painted yellow canary which wears a raven costume

supports (I). Can these instances support the hypothesis? To insist on this is to insist that in the first place we should mistake non-falsifying instances for falsifying ones and we can obtain the support of a hypothesis. This fictitious example is a caricature. But in the actual research there are a lot of apparent falsifying instances against newly born hypotheses. So it is not very difficult to obtain corroborations. Generally speaking though it is not irrational to criticize a corroborated hypothesis, is it rational to accept the corroborated one? In this sense I cannot assign any positive role on corroboration.



進化論的認識論を越えて

——後期ポパーの哲学的射程——

山 脇 直 司 (東京大学)

後期ポパーの思想は、著しく進化論的色彩を帯びているため、科学哲学の一潮流を成す進化論的認識論（以下EEと略記）の先駆として位置づけられることが多い。確かに、生物の環境への適応とのアナロジーで、人間の理想的な認識様式——試行錯誤による問題解決——を捉えるという点で、ポパーとEEの間には、大きな共通点が存在する。また、カント流の妥当性のア・プリオリを拒否しつつも、タブラ・ラサを前提にしたロックやヒューム流の経験論を批判し、認識主体の発生的ア・プリオリ（期待の地平）の意義を説くポパーの見解は、ドイツ語圏のEEの基本命題、すなわち、「長い進化のプロセスによるア・ポステリオリの所産として人間のア・プリオリ的認識能力を承認する」という命題に、うまく合致している。だが、特に後期ポパ

ーの思想は、単なる科学基礎論や狭義の認識論には尽きない「形而上学的—社会哲学的」内容を有していることが看過されてはならない。

ポパー思想の形而上学的内容は、多くのEE論者にとって躓きの石になっている三世界相互作用論に求められる。それは、たとえ仮説的試みにせよ、「自我—世界」論を正面から展開している点で、科学哲学のレベルを越えて、形而上学（メタ・自然学）的伝統のコンテキストで論議されて然るべきであろう。端的に定式化すれば、ポパーの「自我—世界」論は「能動的—批判的—有限的」自我論と「進化的—多元的—可謬的」世界論の組み合わせから成り立っている。このような思想は、はたして形而上学的伝統のなかで、どのように評価され、位置づけられるべきであろうか。

また、ポパー思想の社会哲学的内容は、世界3の考え方に示されている。ポパーの言う

世界3は、プラトンのイデア界と異なり、ポジティブな諸価値のみならず、誤れる理論、誤れる問題解決、扇動的なイデオロギー、抑圧的な社会制度等々のネガティブな諸価値をも含んでいる。ポパーからみて、人間は世界3によって、他の動物以上の卓越した存在者にも、動物以下の野蛮な存在者にもなりうるのである。（そして、そこから、ポパーの情熱的な全体主義批判や歴史法則主義批判、さらに可謬原理がよく理解されよう。）だとすれば、世界3そのものは、人間の倫理的行為の基礎とは必ずしもなりえず、逆に人間の倫理的行為が世界3をコントロールしていくと考えねばならないように思われる。だがはたして、ポパーはこの点に関して納得のいく首尾一貫したロゴスを提供しているであろうか。

シンポジウムでは、だいたい以上の問題設定のもと、ポパー思想の射程・意義・問題点を探っていきたい。 (1991. 4. 30)

事務局より

今回のシンポジウム「進化論的認識論」の提題者の発表構想については、前号のポパーレターVol.2 No.2をご覧ください。嶋津先生の「認識の進化と「開けゴマ」」、西脇先生の「進化論への反省」が掲載されています。

本号の山脇先生の「進化論的認識論を越えて--後期ポパーの哲学的射程--」は、前号のポパーレターで「ポパーにおける進化論的特質」という題でお書きになっていた発表計画の題を変更し、内容を補足するものです。

なお、シンポジウムの提題者として前号のポパーレターで「進化論的認識論（EE）の諸問題」を書いていたいたっていた、小河原先生は掲示板にもある通り、カナダのヨーク大学のジャーヴィー教授のもとに留学されることになり、欠席されることになりました。

また、前号のポパーレターには小河原先生が作られた「進化論的認識論関連の邦語文献」が掲載されています。今回のシンポジウムに参加される方にとっても役にたつと思います。是非ご覧になって、皆様のお気づきになった文献が他にもありましたら、事務局にお知らせください。第二版という形で文献表を充実させ、いずれポパーレターに掲載したいと思えます。

